京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十二卷　第五號

大正十年五月一日發行

論叢

戰後に於ける獨逸の財産稅を論ず・・・法學博士　小川鄉太郎

利潤配分實施上の諸問題・・・・・・法學博士　田島錦治

需要曲線供給曲線及び價格曲線・・法學博士　河上肇

戰後獨逸の社會主義運動・・・・・法學博士　河田嗣郎

時論

稅制整理の主要問題に就きて・・・法學博士　神戸正雄

說苑

舊岩國藩の製紙原料保護政策・・・經濟學士　吉川元光

我國在來の商業帳簿・・・・・・・法學士　大森研造

所得と勞賃・・・・・・・・・・・經濟學士　堀經夫

雜錄

Lexis の公共福祉觀・・・・・・・・法學博士　財部靜治

最近我國に於ける地方費の組成と增加・・經濟學士　小山田小七

國際勞働立法・・・・・・・・・・法學博士　河田嗣郎

戰後獨逸の社會主義運動（一）

河田嗣郎

一　獨逸社會民主々義の二潮流

過般の世界大戰は、獨逸の社會民主々義に對して一大試練を與へた。然かも獨逸の社會民主々義に取つては、大戰は實に之れ二重の意義を有する一大解放に外ならなかつた。卽ち一面に於ては、歷史的政治的幷びに社會的なる諸多觀念よりの解放たり、他面に於ては、長く之を持續すれば持續するほど到底堪え難きに至るべかりし實地政策よりの解放であつた。[1]

之を社會黨の實狀に就いて見るも、創設以來半世紀以上に涉れる光明に照されたる歷史を有し、其の黨員の數に於ても、其の政治的實勢力に於ても、世界の社會黨中に在つて、一頭地を拔いて居た獨逸の社會民主黨は、開戰以來其の態度に就いて兎角世の指彈を被り、終には其中に少數派と多數派との分立を見るに至り、結局少數派は分離して新たに獨立社會黨を組織するに至つた。

獨逸の社會主義運動に於ける此の動搖は、其の經過と原因とを攷究することに依て、吾等に色

1) Paul Lensch, Die Socialdemokratie, ihr Ende und ihr Glück. Leipzig 1916, S. 1.

々のことを敎えて呉れる。茲に私は其の一端を窺つて見たいと思ふのである。

獨逸の社會黨が大戰を機會に終に分裂するに至つたのは、抑も深き理由あることゝする。卽ち大戰以前よりして既に獨逸の社會黨の體內には、二つの相容れざる血液が流れて居たのが、終に大戰といふ機會に依つて相分れ、其の體內に長く宿るを得べからざりしものが、出でゝ一の新たなる團體を造るに至つたものたるに外ならぬ。而して其の二つの相容れざる傾向とは、過激派分子と穩和派分子とを意味するのであつて、前者はマルクスの敎義を飽迄押詰めたる主義の上に立てるもの、後者は所謂修正派に屬するものとする。

然し此の兩者は全然相反覩せるものではなく、其の世界觀の上に於ては兩者は同一立場に立つものたるのみならず、其の政治上の終極目的に於ても、兩者は同樣に社會主義を標榜するもので、此等の點に關して、兩者相容れざる所はない。相容れざる所は實に其の政治上の主義之れである。卽ち所謂正統マルクス派は飽迄階級戰爭の敎義を守り、資本主義に對する鬪爭を以て、階級的自覺ある無產者をして糾合團結せしむる要件なりとし、此の資本主義に對する戰鬪に依て、組合的に結合せる勞働者を訓練し、遂て現時の資本主義制が必然的に崩解する曉に於て、新たなる社會主義制を造り上ぐるに就き、克く其業を爲し遂げ得べきやう用意せしめねばならぬとする。マル

クス派は此の教義に固着するが故に、苟くも階級戰爭を軟化せしむるやうな事柄は悉く之を排斥し、勞働者が實地の政爭に依て贏ち得る所の結果たりとも、若しそが此の主義を軟弱ならしむるものたらば、飽迄排斥せられねばならぬとする。從て此派の人々に對しては、社會主義は、資本主義の現制が崩壞したる後に於て實現すべきものたる次第である。

之に反して修正派の人々は、社會主義的進化は、資本主義の現制度の存續する間に於ても、能く組合運動や政治的鬪爭やに依て行はれ得るものと爲す。卽ち彼等は、若し資本主義制がカーテルやシンヂケートやトラストやの形に依て、自己保存の働を進め、資本主義崩壞の氣運を延長し行くならば、社會主義運動は資本主義制の體內そのものに於て、勞働組合政策と民主々義とに依り、生產と分配とをして益々社會一般の支配下に歸屬せしめ、以て社會主義の實現を漸現せしめんとするのである。

されば此の兩派は同じく社會主義の實現を目的として進み乍ら、一方は資本主義制の瓦解を期待し、其の將來に向つて進み行き、然かも階級戰爭を以て政治上の主義と爲し、資本主義の崩壞を見る迄は、そは寸毫も軟化すべからざるものと爲すに反して、他方は階級戰爭をば主義とせず、たゞ之を以て社會改良の目的を達すべき手段なりとする。[2)]

斯く所謂正統マルクス派と修正派との間には、其の政治的立場に相違あり、此の相違は戰前に

2) Louis Krafft, Die U. S. P. D.—Ein Beitrag zur Neuesten Socialistischen Bewegung in Deutschland, (im Conradsch. Jhb. f. Nat. u. Stat. III. Folge, 59 Bd. 4 Heft. S. 289 ff.)

於ては、たゞ理論上の相違として續いて來たのである。然るに両者の間には尙ほ此の以外に國家主義的色彩に關する大いなる相違あり、一方が飽迄國際主義卽ち超國家主義を徹底せしめんとするに對して、他方は國家主義の色彩を脫せず、寧ろ却つて國家主義の維持に賦與する所ある態度を持して來た。

後に述ぶべきが如く、元來獨逸の社會黨には國家主義が附き物となつて居たのであるが、特に近時に於ては、所謂社會政策の實施に依り、勞働者の勞働條件は大いに改善せられ、又其の勞賃所得の如きも所謂經濟界の發展と相伴つて增加し、一般的に勞働者の物質的幸福は增進せられ、其事資本主義制の發展に負ふ所最も多大で、然かも資本主義制は何れの國に於ても國家主義と提携するものたるが爲めに、進化論的基礎の上に立つ社會主義者は益々明瞭に國家主義を包容し、修正派の人々の如きも、此の傾向に從て流れた。

斯くて戰前獨逸の實狀に於ては、國家主義は益々地盤を得、『諸國の無產者よ、結合せよ』といふ標語の下に立つ國際主義――超國家主義は、社會黨の實地政策上に於ては、大いに壓迫されてしまつた。而して此の傾向は獨り獨逸に於て之を見る所たるに止らず、諸國に於て之を窺ふことが出來た。卽ち諸國の無產者が其の共通なる性質と利害に依て結合して共同運動を行ふよりも、一國々々に於て勞働團結を固め、現存國家制の下に具體的なる勞働利益の增進の爲めに盡す所が

多かつたのである。從て又一般の傾向に於ては、國際社會主義の主義方針としての階級戰爭も其の意義を輕んぜらるゝことゝなり、社會黨の戰略や目的は、社會主義に固有なる世界觀的理想に對する其の密爾の關係を失ひ、國際的革命主義の理想も漸くに失はれんとするに至つた。[3]

けれども戰前の此の狀態は決して終局的のものではなかつた。階級戰爭の敎義に據て立ち、革命主義の旗幟を揭げたる國際社會主義の傾向は、時勢に依て壓迫はせられ乍らも、決して滅亡したのではなかつた。時勢が變轉しさへすれば、又大いに頭を擡げて活躍を試むべき潛勢力は十分に之を貯へて居たのである。而して終に戰爭といふ大解放運動は、抑へられたるものを解放した。戰爭といふ一大破壞運動は、既成狀態(スタツス、クオー)を破壞した。茲に獨逸の社會黨は其の內部に於ける水と油の混合狀態が分解して、水は水、油は油と相分るゝに至つたのである。

二　國家主義的傾向

獨逸に於ける社會主義運動は、大樣右に述ぶるやうな理由からして、大戰を機會に分解作用を起さざるを得なかつたのであるが、尙ほ詳かに其の理由を明かにせむ爲めには、獨逸の社會主義運動に附着せる國家主義の色彩に就いて、今少しく立入つて詮索する必要がある。

獨逸の社會主義運動が、國家主義の色彩を帶びて居たのは、聊も社會民主黨が創設せられたる

3) L. Krafft, a. a. O. S. 290 ff.

當初からのことゝする。卽ち之を其の創設者より下つて歷代の統帥者に就いて見れば、其の主張と政治的立場とが、國家主義の絕へざる一筋の糸に依つて縫はれて居るのを知ることが出來る。

先づ之をフエルヂナンド、ラサール（Ferdinand Lassalle）に就いて見るに、十九世紀に於ける新しき政治的運動の開拓者の中に在つて、國家主義者たる點に於ても、ラサールは決して何人の後へにも落つるものでない。彼れの著書や演說は明瞭に彼れの國家主義思想を示して居る。當時盛に行はれたるマンチエスター流の個人主義に對して、ラサールは頗る熱誠に國家主義を高唱して居る。彼は國家を以て、各個人が自分々々の力を以てしては到底到達することを得ざる生存狀態にまで各個人を上ぼらしむるものと爲し、國家は又各個人が自分々々では到底之を得ることの出來ぬ教育と力と自由とを各個人に得せしむる所のものと說いて居る。而してラサールはたゞ一般的に國家觀念を闡明せるのみではなく、特に獨逸といふ國家觀念を高調した。人動もすればマルクスをば國際的（超國家的）なりとし、ラサールを國家的なりとして、兩者を對立せしむるが、之は間違つて居る。けれども又そこに一塊の眞理が介在せぬでもない。ラサールは獨逸の唯中に住ひ時の獨逸の國家的氣運の高調に漂はされた人間だから、頗る獨逸國家なるものに對して執着を持て居た。然るにマルクスは永く倫敦に客住し、廣く世界の政治や經濟に就いて概括的に之を洞察するの機會と觀察力とを持て居たから、特に獨逸國なるものに對して、執着を感ずること、

ラサールほどではあり得なかつたのである。

ラサールの政治上の遺言執行者と見らるべきヨハン、バプチスト、フオン、シユワイツアー Johann Baptist von Schweitzer はラサールほど有名でもなく、又屢々誤解されたる人物であるが、然し頗る熱烈なる勞働運動の指導者で、獨逸の勞働運動史には其名を逸することが出來ぬ。而して彼も亦國家主義の信者であつて、獨逸の社會主義運動の初期に於ける國家主義的色調は、又彼れに負ふ所が少くない。

フリードリツヒ、エンゲルス Friedrich Engels も亦ラサール、シユワイツアーに劣らず國家主義者である。彼れの両著 Po und Rhein 及び Savoyen, Nizza und der Rhein は、彼れの著書たることの疑はれたる位であつて、此等の書中に於てエンゲルスは大いに獨逸の國家的立場を守護し、獨逸が露西亞より被れる數々の凌辱を記して、熾に反露氣焔を擧げて居る。卽ち彼は露西亞の不法に對しては、啻に筆を以てのみならず劍を以ても獨逸の名譽を守らねばならぬと絕叫し、此の大氣焔は其後斷へず獨逸の社會主義運動に附着せる對露反感の點火を爲せるものと見なければなぬ。エンゲルスは又七年戰爭の破裂せる際にも大いに國家主義を提唱し、又當時虎視眈々たりし佛蘭西に對しても、其のブルジョア共和主義者の野心に對して、獨逸は其の國家的自存の爲めに衞るべき所を衞らねばならぬと公言した。

右等の人々と相劣らずウヰルヘルム、リーブクネヒト Wilhelm Liebknecht も亦國家思想特に獨逸といふ國家思想に對して、友誼的態度を持して居た。彼は再三帝國議會に於ける演說に於てラサール同樣の熱情を傾けて國家思想の道德上の力と偉大さとを賞讃した。卽ち彼は靑年學生の時分より老年に至るまで獨逸國家の合一と自由を熱望し、終始一の大獨逸主義者であつた。而して露西亞に對する反感に於ても彼はエンゲルスに劣るものでなく、早晩露西亞と干戈相見ゆることの避くべからざるをも述べて居る。反露感情は實に又リーブクネヒトが一世を通じて之を抱き又之を以て其の對外政策の大方寸と爲した所である。露西亞の專制主義が地上より驅逐し去らるゝまでは、國民皆兵主義は止むに止まれぬもので、各市民は兵士たり、各兵士は市民たらざるべからずと彼は呼號したのである。何れにしても露西亞の如き半野蠻國の野心に對して獨逸國家を守護するといふことは、實に當然白明の理で、社會主義者たるとたらざるとは、何も關係する所でないと彼は考ふるのである。

次にアウグスト、ベーベル August Bebel も亦國家主義の立場に立てる點に於ては、獨逸社會黨の指導者たりし何れの先輩にも敗けるものでない。或は帝國議會に於て或は議會外に於て、彼ほど盛に獨逸の國家主義を高唱した社會主義者はないと謂つてよからう。彼は獨逸の國家が外國より侵擊を被る場合に於ては、社會民主黨は他の何れの黨派にも劣らず直ちに護國の爲めに馳せ參するを躊躇するものに非ざる旨を繰返し聲明した。獨逸國家の獨立を保持することに對して

は、勞働者も亦他のあらゆる階級の人々と同樣なる利害を感ずる次第で、護國の精神に於て勞働者なればとて他人に讓る筈はなく、勞働者は實に他國の支配に對しては、其背を屈するを肯んずるものにあらず、國家危急の秋に際しては勞働者は最後の一人まで——然り最も年老いたる最後の一人までも、銃劍を執て戰ふを辭せないとは、彼れの表白せる確乎たる自信であつた。而してベーベルも亦傳統的に露西亞に對して大いなる反感を懷ける者であつた。彼は、若し我が祖國の土一升たりとも、之を掠奪併合せんとするものあらば、吾等の力のあらん限り、最後の息の根をつくまでも、之を擊退するに努むるであらうと揚言して居る。蓋し彼は、獨逸の國家が寸斷せらるゝ瞬間は、即ち之れ國内の總べての精神的なるそして又社會的なる生存の亡滅に歸すべき瞬間なりと信じたからである。

エングルスにせよリーブクネヒトにせよ將又ベーベルにせよ、彼等が露西亞に對して向けたる反感憎惡は、洵に甚しいものであつた。露西亞を以て慘虐と野蠻の巢窟と見、獨逸のあらゆる文化の仇敵なりとし、露西亞が獨逸に勝つといふことは、即ち社會民主黨の沒落を意味するに外ならずとした。惟ふに之は彼等が主義の上より露國の專制的ツアールドムを以て社會民主黨の主義とする所と氷炭相容れざるものと信じ、露西亞主義の勝つといふことは、民主的社會主義の亡ぼさるることに外ならずと考へたからでもあるが、又一つには獨露互に國境を接して、政治的に軍事的に經濟的に赤裸々なる利害衝突を見ること繁くして、兩者は國家として俱に天を戴き得ざるものと思はしむる實物教訓が、常に相踵いで表はれ來たからのことゝ見なければならぬ。特に此

の両者折衝の勢が年と共に痛切を加へ、バルカン問題に於て火花の散らんとせしことの度重なるものあるに至つては、獨逸國内に於ける一般的反露熱の高まると共に、社會民主黨の人々も、此の國民的感情を分たざるわけには行かなかつたのである。

一九一三年に獨逸は露西亞の軍備擴張に對して大いなる軍備充實案を立て、其の豫算が帝國議會に表はれたる際の如きも、ベーベルは其死に先立つ數週間なりしに拘らず、尙ほ祖國を守るに必要とあらば、自ら銃を荷つて戰場に立つをも辭せずとするの意氣を示し、社會民主黨は其の豫算に協賛することゝなつた。私は當時恰も伯林に在つて、此の國家的熱情を社會黨の間に見るの實況を目擊して、實は聊か奇異の感に打たるゝを禁じ得なかつたが、然しそれは奇異な現象でも何でもなかつたのである。國家主義は社會民主黨の間にも當初から盡きざる力を以て流れて居たのである。

ベーベル以外尙ほジンガー Singer アウエル Auer ベルンシタイン Bernstein ノスケー Noske 等の名を數へ來れば、何れも皆之れ國家主義の血を多分に藏する人々であるが、ゲオルグ、フォン、フォルマール Geor gvon Vollmar が一九〇七年にスツットガルトに開かれたる國際社會黨（インターナチヨナール）の大會に於て獨逸の代表者として出席して爲せる演說中の一句の如きは、最も雄辯に獨逸社會黨の國家主義的思想を啓示するものと見ることが出來る。彼れの言葉に曰く、國際主義といふことは非國家主義といふことゝ同一義なりと思はゞ、それは誤解である。吾等は祖國を有せずと思はゞ、それも誤解であると。[4]

4) Konrad Haenisch, Die deutsche Socialdemokratie in und nach dem Weltkriege, 4. Aufl, Berlin 1919. S. 73 fg.